

聖書箇所:ルカの福音書 6章 1～5節

説教題:安息日の主

1 パリサイ人たちの疑問

(1) 安息日に弟子たちがしたこと

前回、レビという取税人がイエスから声をかけられ、すぐに従っていったところを見ました。レビはイエスを自分の家に招待し、大宴会を催します。そこにはイエスとその弟子だけではなく、罪人と呼ばれていた人たちも招かれていました。パリサイ人たちはそれを見ていきりたち、「なぜあなたがたは罪人どもといっしょに食事をするのか」と抗議しました。

今日の箇所でも、食事のことが問題になっています。ある安息日に、弟子たちは麦畑のなかを通っていたときのことで、弟子たちは腹が空いたので、麦の穂を摘んで、手でその実を取り出し、そのまま口に入れ食べました。それを見ていたパリサイ人たちは、すぐにクレームをつけます。「なぜ、あなたがたは、安息日にしてはならないことをするのですか。」

いったい何が問題だったのでしょうか。私たちは最初こんなことを考えます。イエスの弟子たちは確にお腹が空いていたのかも知れない。けれども、他人の畑に無断で入って麦の穂を摘んで食べるのは盗みではないのか。パリサイ人たちはその事を非難しているのだろうか。

(2) 指摘

実はそうではありません。弟子たちが、人の畑のものを勝手に食べても、そのことは特

に問題ではなかった。というのは申命記 23章 24、25 節にこう書かれているからです。

「隣人のぶどう畑に入ったとき、あなたは思う存分、満ち足りるまでぶどうを食べてもよいが、あなたのかごに入れてはならない。隣人の麦畑に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑でかまを使ってはならない。」

どうしてこんなことが言われたのでしょうか。イスラエルにもその日の食べるものにも事欠くような人たちがおりました。今なら生活保護という制度がありますが、当時はそのようなものはありません。その代わりに、食べ物がない者はほかの人の畑に入って食べてもよいというルールを設けました。その実例がルツ記に出て来ます。ボアズという大地主が、畑から全部きれいに収穫しないようにとしもべに命じている場面があります。収穫した麦の束からわざわざ穂を畑に落としておくようにとも付け加えました。それは、ひとえに夫を失い畑も失って困っているルツのためでした。ルツが、自由に畑に入って落ち穂を拾い、十分に食べられるようにとの配慮から出たことでした。

ですから、イエスの弟子たちが畑に入って食べたことは問題ではなかったのです。問題なのは、それをしたのが安息日であったということでした。というのは、出エジプト記 34章 21 節にこうあるからです。「あなたは六日間働き、七日日には休まなければならない。耕作の時も、刈り入れの時にも、休まな

ればならない。」

七日目は安息日と呼ばれていました。律法には、その日には完全に休まなければならないと書かれている。手で穂を摘むことは、完全な労働行為である。よっておまえたちは安息日に関する律法に違反している。それがパリサイ人の主張でした。

いったいどう考えたらよいのでしょうか。聖書のある箇所には「食べてもよい」と書かれている。けれども別の箇所には「安息日を守れ」ともある。こんな時は、いったいどちらを守ればよいのか。

私たちも時々聖書には矛盾するようなことが書かれているように思えるときがあります。そのようなとき、どのように考えるべきなのか。イエスご自身がこの問題を解き明かしていかれます。

2 イエスの答え

(1) ダビデがかつてしたこと

イエスはまず旧約聖書に出て来るある有名なエピソードを取りあげます。3, 4節。「あなたがたは、ダビデが連れの者といつしよにいて、ひもじかったときにしたことを読まなかったのですか。ダビデは神の家に入って、祭司以外のものはだれも食べてはならない供えのパンを取って、自分も食べたし、供の者にも与えたではありませんか。」

このダビデのことは、第一サムエル記 21章に詳しく書かれています。ダビデの上司であったサウルは、ダビデに対するねたみからダビデを殺そうとします。それを知ったダビデは数人の部下を連れ、命からがら逃亡生活に入ります。出発があまりにも急だったこともあり、途中で食べる物がなくなりました。それでアヒメレクという祭司のところに寄

り、何か食べるものがないかと尋ねます。ところが、そのとき普通の人が食べてもよいパンは置いてなかった。その代わり、祭壇にささげられたパンはありました。パンが祭壇にささげられていたということから、ダビデがアヒメレクのところ尋ねてきたのが安息日であったことがわかります。

祭壇にささげられたパンは、祭司以外は食べてはならないと律法で定められていました。しかしダビデはそれを食べます。パリサイ人の論法に従えば、ダビデは安息日にしてはならないことをしたことになります。しかし、聖書にはダビデが律法を破ったので神から特別のさばきを受けたというようなことは書かれていません。イエスご自身、ダビデがしたことはまったく問題がないと認めておられるばかりでなく、神の深いみこころを現しているときえ評価しておられるようです。

(2) 「安息日の主」

いったいどんなふうに評価しているのか。パリサイ人たちの質問はこうです。「なぜ、あなたがたは、安息日にしてはならないことをするのですか。」具体的には、弟子たちが麦の穂を摘んで食べているのは、安息日規定に違反しているということでした。

これに対するイエスの答えはこうでした。4節。「ダビデは神の家に入って、祭司以外の者はだれでも食べてはならない供えのパンを取って、自分も食べたし、供の者にも与えたではありませんか。」

イエスのことばはいつもそうですが、語られている意味はわかるようでいて、なんだかよくわからないという曖昧な印象がいつもつきまといます。一度読んでみいったい何を

言いたいのかぴんと来ないことが多いのです。私はそう感じます。

イエスがダビデのしたことを簡潔にまとめ、旧約聖書にはこう書いてありますよねと、確認しているということはわかります。けれども、ダビデのことと今このとき、パリサイ人が問題にしていることと、どう関係があるのか、そこがわかりにくいのです。イエスはこれらの疑問について詳しく説明することなく、最後にこう付け加えます。5節。「人の子は、安息日の主です。」いったい何のことか。ますますわからない。

けれども、よく見るとイエスはいくつかのヒントを与えてくださっています。イエスは大切なことを教えようとされています。ヒントを手がかりに少しずつ考えていきます。

3 イエスが語られた意味

(1) ダビデがいつしよにいて

ヒントは三つあります。一つは「ダビデは供の者といっしよにいた。」二つ目は「ひもじかったとき。」三つ目は「供の者に（パンを）与えた。」

まず一つ目の「ダビデが連れの者といっしよにいた」から見ます。イエスがわざわざダビデのことを取りあげているのには理由があります。今この時点のこと、つまりイエスと弟子たちのことと、このダビデのこととが大いに関係があるので、わざわざ取りあげているのです。

どのように関係があるのか。こう考えてみてください。ダビデのことをイエスに置き換えてみましょう。そして、ダビデといっしよにいた連れの者たちのことを、イエスの弟子たちに置き換えてみる。そのように考えると、イエスが何を言おうとされているのか少し

ずつ見通しが立ってきます。それが「いつしよにいて」という意味になります。

(2) ひもじかったとき

それでは二つ目、「ひもじかったとき」はどうでしょう。

ダビデがわざわざ祭司アヒメレクのところを尋ねたのは、お腹が空いて食べるものがなかったからでした。そのときお腹が空いていたのはだれでしたか。そんなこと聞くまでもないと思うかもしれませんが、あえて確認します。イエスははっきりと言われます。「ダビデが連れの人といっしよにいて、ひもじかったときに」とあります。連れの人たちだけがお腹が空いていたのではありません。ダビデも空いていた。

この方は神のひとり子です。神である方が、私たちと同じようになられる理由は一つもありません。しかしイエスはどこまでもいつしよなのです。弟子たちがお腹が空いていたのなら、イエスも同じようにお腹が空いていた。もし私たちが、なにかのことで苦しい思いをしているのなら、イエスもまったく同じように苦しみを共にしてくださる、そのことを現します。

(3) 供の者に与えた

そして三つ目。「供の者にも与えた。」イエスはパリサイ人から指摘されている問題を、弟子だけの問題だとは見ておられません。ご自分も弟子といっしよであることを強調しようとされます。いや、ただいつしよにいました。いつしよにおなじ事をしましたと言っているのではありません。それ以上です。なんと仰っていますか。イエスはダビデのことをとおして、自分が先頭に立って弟子たちに

麦の穂を食べるようにと勧め、自分のほうから弟子たちに分け与えたのだ。そして自分もいっしょに麦の穂を食べたのだ。そう語っているのです。

組織のトップに立つイエスという視点に立てば、イエスはリーダーとして模範的な態度を取っているように見えます。弟子のしたことはリーダーの責任であると言っているようにも感じます。でもなにか行き過ぎのような気もします。弟子の問題はリーダーが責任を負うのはよいとして、リーダー自ら率先してやりました、自分から分け与えたのですというのは、事実と違うように見えるのです。

(4) 安息日の主

「食べる」と言うことに関して、パリサイ人から何度もクレームをつけられました。イエスはなぜそこまでした「食べる」ということにこだわるのでしょうか。もちろん、それは主の祈りにもあるように主は私たちの必要を覚えてくださっているということでもあります。でもそれだけだというのなら、なぜこんなにパリサイ人と深刻な争いを繰り返すのかわかりません。そこには何か深い理由があるはずです。

今三つのヒントを見てきました。そのことから、「人の子は、安息日の主です」の意味を考えます。

イエスは弟子たちといっしょにおられました。イエスは神でありながら、人となられ、人が経験するすべての弱さを味わわれました。私たちがいつも感じるお腹が空くことを苦しさ、心細さも経験されます。ですから私たちには何か必要なのか、ご自分のからだで知っておられます。口から食べるパンはもちろん必要だと知っておられます。しかし一方、

この方は、パンだけあれば私たちが十分満足して幸せな人生を送ることができるとも考えておられません。まだなにか足りないのです。

主が、悪魔の試みを受けられたとき、こう言われました。「人はパンだけで生きるのではない。」その時、主は四十日間断食しておりましたから、もちろん空腹でした。それなのにこう言われたのはなぜか。パンは必要ないと言っているのではありません。今日の箇所のおりにお腹が空いたら食べることは必要だと主は認めておられます。でもパンだけあれば十分だと言っているのではない。もっと大切なものがある。主は言われました。

「わたしかいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」(ヨハネ 6:35)

主は分け与えようとされているのです。どのようにしてでしょう。ご自分も空腹になられてです。

だれに与えようとされるのでしょうか。いっしょにいる者たちにはです。そのいっしょにいる者たち、どんな人たちですか。主のみこころをわきまえることに鈍感な弟子たちです。罪人と呼ばれる人たちです。

どのようにして分け与えてくださるのですか。ご自分のからだを十字架におつけになり、そのからだを裂いて私たちに与えようとされます。

「人の子は、安息日の主です。」この方は安息日にあがめられる神の子なので、だから私たちは礼拝しなければならぬ。そんな意味ではありません。パリサイ人たちは得意になって、「安息日を守れ」と繰り返しました。安息日を何をしたのか。あるいは逆に何をし

なかったのか。そのことばかりを見ていたら、主イエスの恵みを取り逃がしてしまいます。私たちはそんなことを言う必要はもうない。

「安息日の主」は、ご自分のからだを分け与えてくださるのです。決して飢えることもなく、渴くことのない食べ物を与えてくださるのです。その恵みを味わうだけで十分ではないですか。

この方が、あがめられるために言われたのではありません。かえって、私たちよりも低くられるために言われたみことばであったことを覚えたいと願います。